

日本体育大学紀要 (Bull. of Nippon Sport Sci. Univ.), 47 (2), 121–127, 2018

【原著論文】

英語の多義語指導，多義語習得モデルに関する研究

—身体部位に関わる英語表現に焦点を当てて—

山口 和之

日本体育大学外国語学

A study of how to teach English polysemous words: A special emphasis on polysemy of English body terms

Kazuyuki YAMAGUCHI

Abstract: English education in Japan has been criticized repeatedly, and one of the reasons for this has been concerning vocabulary teaching, especially teaching of polysemous words. The purpose of this paper is to argue that English polysemous words can be effectively acquired by utilizing the abstract tools of ‘core (image) schema’, ‘metaphor’ and ‘metonymy’, which have been argued as ‘psychologically real’ in the field of Cognitive Linguistics. Among English polysemous words, this study specifically discusses the terms of English body parts.

要旨：日本の英語教育は絶えず批判されてきたのは周知の通りである。その批判の一つは、語彙指導，特に多義語指導に関わっている。本稿では，多義語指導モデルを認知言語学の知見に基づき提案する。具体的には，「コア（イメージ）スキーマ」「メタファー」「メトニミー」などの，多くの先行研究で前提とされている概念は多義語指導においても有効であることを示す。本研究では，（本文で議論する理由により）英語の身体部位に関わる語彙に集中する。

(Received: October 31, 2017 Accepted: December 1, 2017)

Key words: vocabulary teaching, polysemous words, core (image) schema, metaphor, metonymy

キーワード：語彙指導，多義語，コア（イメージ）スキーマ，メタファー，メトニミー

1. はじめに⁽¹⁾⁽²⁾

本稿では，英語語彙を効率的に習得するための語彙指導および語彙習得モデルを提案する。外国語の語彙指導において特に難しいのは，多義語を効率的に如何に学習者に教授するかであろう。本稿では，多義語指導モデルを認知言語学の知見に基づき提案する。特に「コア（イメージ）スキーマ」「メタファー」「メトニミー」などの，多くの先行研究で前提とされている概念は多義語指導においても有効であることを示す。本研究では，英語の身体部位に関わる語彙に集中する。日本の英語教育では「政治」や「文化」などの抽象的なテーマを扱う授業が多く，そのため抽象的な内容を語る英語語彙に学習が集中し，具体的な経験，例えばスポーツや日常の身体動作を語ることは軽視されてきた。しかし，言語習得において身近な経験を通して抽象的な世界を理解する，という認知言語学の前提に従うと，英語学習においても，最初に具体的な世界を語れるようになり，それを通して抽象的な世界を語れる英語力を習得する，というのが自然な学習過程となろう。それゆえ，基本的な身体動作を語る際に頻出する英語の身体部位に関わる多義語を習得することは英語の基礎レベル向上に結びつく，と主張することができる。

2. 日本の英語教育の問題

2.1. 「使える」英語指導を目指して

「長い時間を英語教育に費やしてきたにもかかわらず英語を実際の場面で使えない」という趣旨の批判が多く日本の英語教育に向けられてきたが、「使える」を「日常に即した経験を語る」と解釈すると、確かに従来の英語教育には不十分な側面が多々ある。その一つは、英語教育で扱う内容であろう。「政治」「思想」「文化」「歴史」などの抽象的な内容を英語で読むことに力点が置かれ、多くの時間を「スピーキング」ではなく「リーディング」に割いてきた。そのため、抽象的な議論を英語で行うことが比較的得意であるという日本人は多いかもしれないが、以下のようなスポーツそして日常生活で使用される動作を難なく英語で語れる日本人は少ないのではないか。

- (1a) 「手や足をゆるみなく伸ばす」
- (1b) 「肩の力を抜き足を上げる」
- (1c) 「膝を緩めない」
- (1d) 「つま先立ち」
- (1e) 「中腰」
- (1f) 「顔を前に出す」
- (1g) 「腰を曲げない」
- (1h) 「足の指先をまっすぐにする」
- (1i) 「腹を突き出すように」

言語習得において、身体動作を含む具体的な世界を最初に学び、それを土台として抽象的な世界を理解する、という習得過程は認知言語学の多くの研究成果が明らかにしている。第一言語習得の際、幼児は具体的な意味をまず習得し、それを抽象的な世界にマッピングする。例えば、「長い」「短い」という物理的スケールをまず習得し、その基本イメージを時間領域にマッピングする。そのメタファー的思考を通して、時間の長さ・短さを理解するが、注目すべきは、人は時間を空間にもとづいて理解している点である。Lakoff and Johnson (1980) によれば、多くの抽象的な世界は、私達の具体的な世界の認識に基づいている。この考えに従えば、我々の経験世界、例えばスポーツや日常生活の身体動作に関わる語彙の習得なしに、抽象的な世界を語る表現習得に力を注ぐのは、土台が不安定な言語知識となってしまう。身体動作のような具体的な経験を英語で語れることが最初で、その後抽象的内容を英語で語る力を培うべきであろう。

2.2. 日本の英語教育における語彙指導について

日本の英語教育のもう一つの問題は、英語の語彙指導であろう。英文法と比較すると語彙指導には重きが置かれてこなかった感がある。しかし、必要な英語語彙の知識なしには円滑なコミュニケーションは望めない。極論すれば、文法の知識が乏しくても豊富な語彙力があれば自分の意志を必要最低限相手に伝えることができる。そう考えると、英文法と同様に、もしくはそれ以上に語彙指導に力を注ぐべきである、という結論になる。しかし、日本の英語教育における語彙指導は、単語リストの暗記程度しか行われず、その成果は学習者の努力に委ねられていたように思われる。日本の英語教育は多くの批判にこれまでさらされてきたが、文法重視・語彙指導軽視の風潮は多くの問題の原因になっている。

Littlemore (2009) は、第二言語の語彙習得には語彙知識の広さ (vocabulary breadth), 多義性の理解 (vocabulary depth), 語間の拡張関係の知識 (network knowledge) が関わるとしている。語彙サイズを増やすことに関しては、多くの学習者は高校や大学受験のために単語帳などを使用し覚える。これは、おそらく日本の英語教育の特異な語彙指導と考えられ、一定の成果を学習者にもたらししている事実是否めないが、多義の理解という点に関しては不十分である。これは、ほとんどの語が多義である、という事実を考えると、語彙指導・学習にとって致命的である。語の形式と意味を結びつけた、暗記するだけの学習では不十分で、多義語の複数の意味関係の理解を容易にするような語彙指導が必要になってくる。2.1にあるように、語彙指導において特に身体動作のような具体的経験を英語で語れるようになることが英語力向上には必要であると筆者は考える。そのため、本研究は身体動作に類出する身体部位に関わる語彙を考察対象とする。

2.3. 英語の身体部位語彙に関して

最初に、多義語の語彙指導の難しさを示すため、‘back’を考えてみよう。このタームは多義である。多義語の語彙指導は難しい。多くの場合、1つの形式（音）が示す複数の意義の関係が整理できず、したがってただ暗記させる、という指導に終わってしまう。例えば、以下の例を考えてみよう。（『ランダムハウス英和大辞典第2版』からの引用。）

- (2a) a rounded back
- (2b) the lower back
- (2c) the back of a chair
- (2d) a man with a strong back
- (2e) Back me up.
- (2f) a certain backed with dark material
- (2g) a beach backed by hills
- (2h) He backed the horse.
- (2i) He backed up three paces

(2a) は「背中、背」という意味で、おそらくどの辞書においても、そして直感的にも‘back’の中心的意義であろう。多くの認知言語学の研究によると、この意義から他の意義が派生され多義となる。(2b) は背中の中でも「腰」を表し、(2c) は「後ろ（背部）」という空間概念を表している。(2d) は「(責任・重荷・労苦などに) 耐える力」を表し、背中（背骨）から、多くが想像するであろうその機能に着目している。(2e) は「後援する・後押しする・援護する・補足する」のような意になり、動詞として行為（プロセス）を表すようになる。(2f) は「裏打ちする」、(2g) は「背景をなす」、(2h) は「(動物に) 乗る」、(2i) は「後退する」という意味になる。‘Back’という身体部位の例からわかるように、多義語の理解は、(辞書の一番最初に記載されているであろう) 基本的意味だけを覚えてもその全体像が見えてこない。それゆえ、多義のネットワークを射程に入れた英語学習が必要になってくるのである。

多義語は英語の身体部位に限らず、英語語彙を含む全ての言語にみられる普遍的な特徴である。以下では、認知言語学的アプローチに基づいて多義語の指導・学習モデルを考察する。

3. 認知言語学的アプローチによる多義語の効率的学習に向けて

3.1. 「コア」「イメージ・スキーマ」に基づくカテゴリー化

認知言語学の領域では、文法や意味への多くの異なるアプローチがあるが、いくつかの共通した前提がある。その一つが、認知科学の知見に従う、というものである。認知科学の先行研究に従うと、カテゴリー化の際、人の認知の法則に従い具体例から共通の特徴を抽出する。認知科学では、それをスキーマと呼ぶ。Lakoff (1987) はそれを前概念的 (preconceptual) であると主張し、概念の基礎となる抽象的イメージとする。近年、スキーマは応用言語学の領域でも重要な役割を果たしている。例えば、佐藤・田中 (2009) はコア (スキーマ) 概念を語彙習得 (英語学習) の中心に据えている。スキーマを多義語指導の中心に据える利点は、多義を一つのコア的意味として理解できる点であろう。以下の身体部位のコアスキーマの意味は以下のように考えることができる。(以下『英語語義イメージ辞典』を参考にしている。)

- (3a) back 後 (背)
- (3b) body 内容物の詰まった塊 (身体)
- (3c) bottom 底 (尻)
- (3e) face 面 (顔)
- (3f) foot 足元
- (3g) front 前
- (3h) hand 手
- (3i) head 上部 (頭)
- (3j) leg 脚 (太ももから足首まで)

- (3k) neck 首
(3l) side 側面 (側)

コアスキーマは、多義の背景に共通 (コア) の抽象的図が存在することを明示し、それゆえ、語彙指導の有力なツールとなる。しかし、いかなる具体的な意味派生 (意味変化) が生じるのかはコア (イメージ) スキーマに基づいて推測するしかない。例として 'back' を考えてみよう。この語のコアの意味である「後ろ」に基づいて、確かに (2) の多くの意味をうまく捉えることができるが、例えば、(2d) の「(責任・重荷・労苦などに) 耐えうる力」、(2e) の「後援する・後押しする・援護する・補足する」、(2f) は「裏打ちする」、(2g) の「背景をなす」、(2h) の「(動物に) 乗る」、(2i) の「後退する」のような意義は、コアスキーマを前提にして適切な意味を推測する必要がある。この際、「フレーム」(Fillmore 1982)、「理想化モデル」(Lakoff 1987)、「百科事典的意味」(Langacker 1987) などの認知言語学的理論が役に立つかもしれない。それらは異なる理論であるが、違いを捨象すると「知識の総体」と言うことができる。上記の 'back' の多義の意義派生パターンは、英語話者の知識に照らし合わせると十分に理解可能であろう。しかし、語彙指導においては、中心義からの意味変化をただ知識に照らし合わせて推測するように、と指示するだけでは不十分である。コアスキーマから推測できる派生パターンを明示することが効果的な多義語の指導には必要である。この推測パターンを有限の派生パターンに集約したものが『英語多義ネットワーク辞典』に見られる。

3.2. 『英語多義ネットワーク辞典』に基づく分類

多義語研究は、これまでに認知言語学的の領域において多く行われてきた。その多くは、「プロトタイプ・カテゴリー」を前提とする。この考えは、第二言語習得理論にも応用されている。例えば Littlemore (2009) は、多義語習得に関して、プロトタイプと派生的意味の関係を学習者が理解する重要性を指摘している。

多義語の習得が困難である 1 つの理由は、中心義からの意義の派生パターンが語によって異なり、ゆえに無数にあるように感じるからであろうとであろう。

多くの多義語に見られる、中心義からの派生パターンをできるだけ少ない共通の派生パターンに集約することができれば多義語習得はより効率的になる。

本稿では、派生パターン (意味変化パターン) の分類を『多義ネットワーク辞典』のそれに基づきながら、以下の英語の身体部位語の派生パターンを考察することにする。以下、当該辞典の例文およびその説明を引用している⁽³⁾。

| メタファー |
|--|
| 【形態類似に基づく派生パターン】 |
| ● a guitar <u>neck</u> / the <u>neck</u> of a golf club/ the <u>necks</u> of the plants |
| 【機能的類似に基づく派生パターン】 |
| ● the <u>faces</u> of houses/ a cliff <u>face</u> |
| ● Throughout the ripening process, the <u>body</u> of the cheese becomes more and more homogeneous. (身体のように物を支える主要な性質) |
| 【特性類似に基づく派生パターン】 |
| ● The fruit is growing out of the <u>body</u> of the tree under the branches. (身体>胴体のような物の主要部) |
| メトニミー |
| 【空間隣接の派生パターン】 |
| ● The library is on your <u>right</u> hand side, about 0.5 miles south of Grand Avenue. (手が指し示す空間：方向) |
| ● Sleeve and <u>body</u> of the clothes is fastened with buttons. (胴体と隣接する服の部分) |
| 【部分が全体を表すように変化する】 |
| ● There were famous <u>faces</u> and VIPs everywhere. |
| ● They charged ten thousand dollars a <u>head</u> . |
| ● a sad [happy, dark, serious] <u>face</u> |
| 【全体で部分を表すように変化する】 |
| ● The man received one wound in the right leg and another in the <u>body</u> . (身体全体>頭・四肢以外の胴体) |

| |
|---|
| <p>【対象がプロセスを表すように変化する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● They both <u>faced</u> each other and saluted. (「顔」 > 「顔を向けるという行為」) ● The poolside terrace <u>facing</u> the sea. (面している [建物などが正面を向ける]) |
| <p>【道具がプロセスを表すように変化する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● When our car broke down, we had to <u>foot</u> it home [the rest of the way]. ● Ronald <u>headed</u> the ball into an empty goal. ● She <u>handed</u> her plate to the waiter. (人に物を手渡すという行為) |
| <p>【場所がプロセスを表すように変化する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● The local brass band <u>headed</u> the procession of French schoolchildren. (「頭」 > 「先頭 (場所)」 > 「率いる (頭に立つ)」という行為 (プロセス)) ● The peninsula is a 20-mile stretch of continuous white sands <u>backed</u> by a mountain range. (「後ろ」 > 「後ろにあるという状態」) |
| <p>【結果でプロセスを表すように変化する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Prices have now <u>bottomed</u> out. (底 > 不景気などが底を打つ) |
| <p>【プロセスが行為者を表すように変化する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● a factory <u>hand</u> (手で行う行為をする人：働き手) |
| <p>【プロセスが原因を表すように変化する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● I'm looking for a man who's good with his <u>hand</u>. (手で行う行為を遂行する 【ための原因となる】 技量, 腕前) |
| <p>【プロセスが結果を表すように変化する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● the calligraphy was in the Emperor's own <u>hand</u>. (手で行う行為の結果) |
| <p>【道具が結果を表すように変化する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Gallimore ran the fourth <u>leg</u> of the outdoor 4 × 400 meter relay. |
| <p>【入れ物が中身を表すように変化する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● the winning <u>hand</u>/ "What is your <u>hand</u>?" "Full house." (トランプで手の中にある札) |
| シネクドキー |
| <p>【類で種】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● He found the cold <u>body</u> of the bear. (人という類 (カテゴリーの成員) > 人以外の生物 (カテゴリー全体 = 種)) |

『英語多義ネットワーク辞典』に従うと、上記分類はさらに以下の3つの派生パターンに集約される。

- (4a) メタファー
(4b) メトニミー
(4c) シネクドキー

メタファーとは、「2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩」(初山 2014)。メトニミーは、「2つの事物の外界における隣接性、さらに広く2つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩」(同上)、シネクドキーは「より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味をもつ形式を用いて、より一般的な意味を表す比喩」(同上)である。『英語多義ネットワーク辞典』はその冒頭にも明記してあるように、英語の専門家向けに書かれた辞書である。そのため一般の英語学習者の語彙指導には適さない側面もあることを鑑み、修正する必要がある。

まず、メタファーの3区分は、コア (イメージ) スキーマという概念で十分説明が可能であろう。例えば、「形態類似」の例として neck (「人・動物などの」首) から「(瓶などの) 首」, 「特性類似」の例として empty (「〈入れ物が〉空の」から「〈人生が〉空の」), 「機能類似」の例として attack (「〈人・場所を〉激しく攻撃する」から「〈考え・思想を〉激しく攻撃する」) を挙げることができるが、これらの例は、共通のコア (イメージ) スキーマを想定するだけで語彙指導には十分であろう。次に、メトニミーとシネクドキーの区別であるが、理論的には区別をする必要がある。例えば、メトニミーの部分と全体の関係 (例えば、「長髪」は、一部を使って全体を表す。) はシネクドキーの類と種の関係 (例えば、「人はパンのみで生きるにあらず」の「パン」は類で食事 (種))

を表す。)とは異なる。その違いを端的に言うと、メトニミーは空間・時間的的な隣接関係、シネクドキーはカテゴリとその成員の関係である。どちらも図で表すと、部分と全体の関係になるが、前者は空間・時間領域における隣接関係、後者はカテゴリとその成員の隣接関係であり、それゆえ、明らかに異なる関係である。しかし、英語語彙指導においてはこの2つを区別せず、シネクドキーを単に「部分と全体」のメトニミーとしたほうが学習者の負担を軽減できるのではないだろうか。これは今後実験などを通して経験的に確かめていくべき問題であろう。

4. 結 論

本稿では、英語語彙を効率的に習得するための語彙指導および語彙習得モデルを提案した。日本の英語教育では伝統的に英文法と比べ、語彙指導が手薄であったこと、特に多義語の指導を効率的に行うモデルがなかったことを指摘し、認知言語学の知見に基づいた指導モデルを提案した。認知言語学の知見に従えば、言語習得の自然な過程は、具体的な世界に関わる表現の習得が最初であり、それを通して抽象的な世界を語る表現を習得する。しかし、日本の英語教育は、抽象的な世界を語る表現に集中し、そのため、英語学習者は具体的な世界、例えば日常の身体運動を表現することが不得手となる傾向がある。この議論に従うと、日本の英語教育は抽象的なテーマを語るための英語力同様に具体的な世界を英語で語る力を培う方策を考える必要がある。そのため、本稿では身体動作に頻出する英語身体部位語を効率的に習得するため、コア（イメージ）スキーマおよび多義ネットワークパターンに基づいた語彙指導を提案した。

注

- (1) 本研究は、平成 29 年度日本体育大学学術研究補助費の助成を受けている。
- (2) 本研究は、筆者の専任教（日本体育大学）での英語教育および海外実習での経験が下地となっているが、身体動作を適切に英語で伝えられないというのは、体育大学の学生だけに特有の問題ではない。スポーツに英語を通して関与する当事者や仲介者（通訳者や翻訳者）の数が年々飛躍的に増えているが、多くの人が同様の問題に直面することが予想される。
- (3) ここでの分類は、もちろん以下にあるように英語の身体部位語彙に限られた現象ではない。（以下例文は『多義ネットワーク辞典』から引用した。）

| メタファー |
|---|
| 【形態類似に基づく派生パターン】 ● branch（木の枝＞川・道・鉄道などの枝：支流，脇道，支線） |
| 【機能的類似に基づく派生パターン】 ● cap（帽子を被せる＞上に行く） |
| 【特性類似に基づく派生パターン】 ● camp（キャンプ地＞合宿地） |
| メトニミー |
| 【部分が全体を表すように変化する】 ● wheel（車輪＞自動車） ● breathe（息をする＞生きている） |
| 【全体で部分を表すように変化する】 ● eye（目＞眼球） |
| 【道具がプロセスを表すように変化する】 ● hammer（金づち＞金づちで打つ） ● microwave（電子レンジ＞電子レンジにかける） |
| 【場所がプロセスを表すように変化する】 ● closet（クローゼット＞閉じ込める） ● mine（炭坑＞炭坑を掘る） |
| 【プロセスが行為者を表すように変化する】 ● advocate（唱道する＞唱道者） ● guard（守る＞守る人） |

| |
|---|
| 【プロセスが原因を表すように変化する】 ● quarrel (けんか＞けんかの原因) |
| シネクドキー |
| 【類で種】 ● cold (冷たい＞(飲食物が) 冷たい) |

参考文献

- Bréal, Michel. 1964 (1900) *Semantics: Studies in the Science of Meaning*. Trans. by Mrs. Henry Cust. New York: Dover.
- Bybee (1985) *Morphology*. Amsterdam/Philadelphia. John Benjamins Publishing Company.
- Bybee, Joan L., William Pagliuca, and Rever Perkins (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, aspect, and modality in the language of the world*. Chicago: University of Chicago Press.
- Fillmore, Charles (1982) Frame Semantics. In *Linguistics in the morning calm (Selected papers from SICOL 1981)*, ed. The Linguistic Society of Korea, 111–138. Seoul: Hanshin Publishing
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press: Chicago and London.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar*. Vol. 1. *Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Littlemore, Jeannette (2009) *Applying Cognitive Linguistics to Second Language Learning and Teaching*. Palgrave Macmillan.
- Sapir, Edward (1921) *Language: An introduction to the study of speech*. New York: Harcourt. Brace and company.
- Stern, Gustaf (1931) *Meaning and Change of Meaning*. Bloomington: Indiana UP, 1931.
- Yamaguchi, Kazuyuki (2005) A Typological, Historical, and Functional Study of Adpositions in the Languages of the World, Doctoral dissertation, University of New Mexico.
- 池上嘉彦 (1983) 『大修館英語学辞典』(松浪有, 池上嘉彦, 今井邦彦(編)) 大修館.
- 佐藤芳明・田中茂範 (2009) 『レキシカル・グラマーへの招待』. 開拓社.
- 瀬戸賢一 (2001) 「語彙的メトニミーのバタン」. 『大阪市立大学大学院文学研究科紀要』. 105–116.
- (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』. 小学館.
- 寺沢芳雄 (1997) 『英語語源辞典』. 研究社.
- 政村秀實 (2003) 『英語語義イメージ辞典』. 大修館書店.
- 初山洋介 (2014) 『認知言語学入門』. 研究社.

〈連絡先〉

著者名：山口和之
住 所：東京都世田谷区深沢 7-1-1
所 属：日本体育大学外国語学
E-mail アドレス：kazuyamaguchi@nittai.ac.jp